

設立30周年記念

研究紀要

第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

縞条体圧痕文の付く野島式土器

金子直行

—早期後葉における縞条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について—

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味

細田勝

加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係

上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（1）

小野美代子

荒川流域出土の大席式土器について

栗岡潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡

福田聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について

瀧瀬芳之

—埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）—

国界地域の土器流通

赤熊浩一

—下総国と武藏国の様相—

地震で沈んだ倉と古代の集落

田中広明

2011

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 白井沼遺跡出土大麻式土器



2 大型壺口縁部（白井沼）



3 複合口縁壺（白井沼）



4 鋼冶屋・新田口遺跡（非掲載）



5 大型壺口縁部（川合遺跡）



6 大型壺口縁部（川合遺跡）



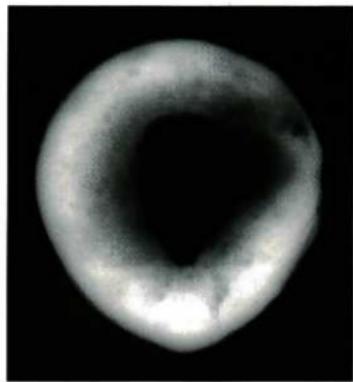
7 大型壺口縁部（川合遺跡）



8 大型壺口縁部（川合遺跡）

口絵2

瀧瀨論文 X線透過写真



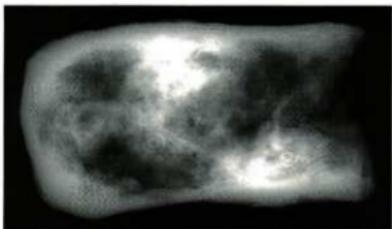
SPM88-041-12



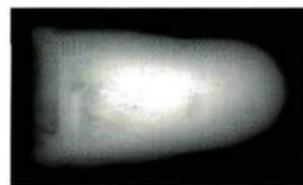
SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64



土偶研究とジェンダー考古学（I）

小野美代子

要旨 考古学は、物的証拠に基づいて過去の社会を研究する学問である。また、先史考古学に限って言えば、物的証拠のみから過去の社会を研究せざるを得ない学問であると言える。物的証拠は、各種の遺構や遺物及びそれらの分析データなどから構成される。したがって、今日まで偶然遺ったか、遺ったものから復元されたデータでしかない。また、昨今の発掘調査事情では、よほど幸運な場合を除き、過去の人々の生活域全体の痕跡を明らかにできる状況ではない。実際は、遺跡として周知される範囲の一部分のみを調査する場合が多く、生活域（集落）の全貌が明らかになることは皆無と言っても差支えないであろう。多くの場合、遺跡の部分的な調査で明らかになった事象から過去の社会に言及せざるを得ないのが現実である。

ところで、先史考古学の研究対象のひとつで、その形状や出土状況などから研究者の数だけ解釈があると言つても差支えない「土偶」について、ジェンダー考古学的視点で何らかの考察をすることが、いかに困難であるかは十分承知している。しかし、あえてこのようなテーマを選んだ訳は、ジェンダー考古学的視点で土偶を解釈した際に想定される問題点を改めて提起し、「人体を象った資料」ゆえに生じる「解釈の偏り」について考察を加えたいと考えたためである。また、安易に土偶や女性像にジェンダー考古学的な解釈を当てはめている論考が見受けられることも、その理由の一つであり、ジェンダー考古学的視点で土偶を解釈した際に想定される問題点の提起である。

1 はじめに

我が国で、「Gender」という概念が意識されだしたのは、1970年代の末頃からであろうか。以来、ジェンダーは「社会的・文化的に形成された性差」という意味に訳され、社会学や女性学、女性史の分野で多く使用され、論議されてきている（註1）。

「Gender」は、文法上の用語（註2）として使われてきた歴史を持ち、欧米では「生物学的な性（Sex）」という意味合いも含んだ概念として用いられている。しかし、我が国では「社会的・文化的に形成された性差」という意味合いが強調され、本来「Gender」の概念に含まれている「生物学的な性（Sex）」という意味合いは、考慮されずに論じられてきたようである。このことについては、我が国で使われている「社会的・文化的に形成された性差」という訳は、誤りであるという指摘もされている（加藤 2006ほか）。

「Gender」という概念は、「社会的・文化的な性のありよう」という意味合いで使われることが、最も一般的なようである。

さて、「Gender Archaeology」という概念は、1960年代以降活発になったフェミニズムの影響を受け、1980年代以降の欧米考古学界において活発に論議されるようになったものである。

簡潔に言うと、それまでの男性中心の学問体系を見直し、「男性とともに存在した女性のありよう」や「女性研究者の視点」を考古資料の解釈にも取り入れ、「社会的・文化的な男女のありよう」を考古学研究の対象としようとする流れである。

我が国に「Gender Archaeology」という概念が紹介されたのは、穴沢啄光が『考古学研究』に Margaret Ehrenberg の著書『Women in Prehistory』（M. Ehrenberg 1989）を紹介したの（穴沢1991）

が最初かと思われる。その後、『Women in Prehistory』の日本語訳が『先史時代の女性－ジェンダー考古学事始め－』として河出書房新社から出版され(M・エーレンバーグ、訳：河合1997)、我が国でも「ジェンダー考古学」という分野が、徐々にではあるが

認識されるようになったように思われる。さらに、2000年前後から岡山大学の松本直子らを中心に「ジェンダー考古学」に関する論考(松本他1999、松本2000、川宿田2006など)がいくつか出され、今日に至っている。

2 考古学研究とジェンダー

(1) 研究者とジェンダー

考古学に限ったことではないが「ジェンダー」のような概念の周知は、その分野の研究者の数や意識に左右されやすい要素を多く含んでいる。

実際、我が国では「ジェンダー考古学」は、ほとんど認識されていない。したがって、この新しい研究の視点を、考古資料の解釈にどのように取り入れができるかを検討することから始めなければならない。

考古資料を検討し、解釈するのは研究者であるので、まず、研究者数から見てみたい。我が国の考古学研究者に占める女性研究者の割合は、決して多くない。ちなみに、2005年度版の日本考古学協会員名簿によれば、埼玉県在住の会員約260名中、女性は十数名に過ぎず、5%弱である。この傾向は、あらゆる意味で人口が密集している東京都においても大差なく、約400名の会員中、女性の割合は約10%にすぎない。

日本考古学協会員の男女比については、井川史子が「Gender in Japanese Prehistory」(F. Ikawa-Smith 2002)で分析をしている。それによれば、1964年時点では会員総数397名中、女性が4名(1.01%)であったのが、発掘調査報告書の刊行数が年間4万件を超える1995年時点でも、協会員総数2851名中、女性は79名(2.77%)と3割に満たないことを指摘している。

このようなデータから推測して、考古学協会に属する研究者全体に占める女性研究者の割合は、現在においても、数%であろうことが予測できる。考古学協会員になることを選択しなかった女性研

究者の存在を考慮に入れたとしても、考古学協会員総数に占める女性会員数は、大学や人口が密集している東京都在住の研究者の2005年度の女性会員比率が10%にすぎないことを考えると、全国的に観てもこの比率を上まわる可能性は、かなり低いと思われる。

社会を構成しているのは、いつの時代であっても男女であり、どちらか一方だけで営まれている社会は皆無といえよう。にもかかわらず、原始・古代以来の人間社会を研究する分野で、男女の研究者数にこのような不均衡が生じていることは大きな問題と言える。このような男女の研究者数の不均衡は、過去の社会事象についての解釈が偏ったものになる一因でもあり、その弊害は決して少なくない。このような状況で、数の上で多い男性研究者が取り上げるテーマが主流のように見えるのは否めないし、女性研究者が扱うテーマが物流の如く思われてしまうことも十分有り得ることであろう。

次に、問題となるのは研究者の意識である。このことについては、松本直子や川宿田好見などが意欲的に問題提起や分析を行っているが(松本他1999、2000、川宿田2006)、以下に、おそらくその氏名から男性研究者であると推察される川宿田の分析をもとに問題点を抽出したい。

川宿田は「日本考古学界におけるジェンダー」(川宿田2006)で、日本考古学界の特殊性および独自性について「①プロの考古学者数や発掘件数が極めて多く、資料の蓄積が著しい割には、考古学一般への貢献度が極めて低いこと。②女性考古学

者の比率が著しく低いこと。」の二点を特に取りあげ、その一因を欧米の理論や動向への無関心・無理解にあるとし、1980年代以降、欧米で活発に論議され、定着している「ジェンダー考古学」を含む新しい分野への取組みが、我が国では殆ど見られないこともその一例であるとしている。

川宿田は、論文への女性の貢献度や大学に籍を置く女性研究者の割合、学生の男女比、女性研究者のテーマ選択の傾向などから、我が国考古学界の研究者のジェンダーについて分析している。具体的には、論文等への女性の貢献度を数値化する「Eースコア」(註3)をもとに『考古学研究』と『American Antiquity』誌上の論文と論文以外の記事の掲載数を分析し、2006年段階の『考古学研究』への女性研究者の貢献度が15年前の『American Antiquity』にも及ばないこと、研究への貢献度や大学の教員数が男性に著しく偏っていること。また、考古学を専攻する学部生の男女比は、ほぼ同率か女性が過半数を占めているにもかかわらず、修士・博士から教授等へと進むに従い女性の比率が極端に少なくなることを指摘し、このことは、将来を見通せるような女性研究者の「役割モデル」が少ないため、女子学生か専門者としての将来像を描くことができないからではないかと結論づけている。

研究テーマについても、考古学で学位を取得した女性研究者が、食品加工工具・繊維製品・赤色顔料・人骨・動植物・環境・認知考古学など「男性が選択するテーマ(=本流のテーマ)」とは異なる

「女性らしいテーマ」や「男性があまり取り上げないテーマ」を選択する傾向があることを指摘し、この背景には、男性研究者中心の学界で生き抜くための女性研究者の戦略もあるのかもしれないことを推察している。さらに、卒論についての分析も行い、男女で共有されるテーマの他に、女子学生は、玉や装飾品・衣服・形象埴輪・陶磁器など、男子学生は、狩猟や石製品・生業・住居などに関

するテーマを選択する傾向が見られることをあげ、博士学位取得者の男女間でのテーマの違いは、学部時代からの延長で、女子学生の成長過程の「ジェンダー・ハビトゥス」の反映であると同時に、女子学生は初期の段階から「考古学の中心テーマ」＝「男性のテーマ」という図式を感じ、「周辺分野」を選択せざるを得ない環境に置かれるのではないかと分析している。

確かに、川宿田が指摘するようなことは、全体的な傾向として見受けられるし、最初に述べたように日本考古学協会の会員総数に占める女性の割合も10%にも満たないのが現実である。ただし、川宿田の分析は、大学に籍を置いているか博士の学位を取得した研究者を対象にしているため、行政や各種調査機関に籍を置き、消滅する遺跡と向き合いながら地道な活動を続けている研究者の実態とは若干乖離していることも否めない。行政や各種調査機関においても、女性職員数(発掘調査担当者数)は、男性に比べて極端に少ないと事実である。しかし、発掘調査を指導し、調査報告書をまとめる力量の有無は、男女差というよりは個人差によるもので、徐々にではあるが発掘調査担当職員に占める女性の割合は増加していると言える(註4)。考古学が物的証拠に基づいて過去の社会を研究する学問であり、調査現場のデータの蓄積が考古学研究に欠かせないものである以上、実際の発掘調査に携わる女性調査員数の増加は評価すべきものと言えよう。遺跡の調査過程において、男性研究者がつい見落としてしまう資料に、過去の社会を解釈する上で重要なものが含まれていることは多々あると思われる。土器論や石器論、集落論などに主に関心を持っていて、些末なことには無関心な男性研究者の見落としを回避できるのは、傍流のテーマ(?)にこだわりつつ遺跡に向き合っている女性研究者なのではないだろうか。

さて、川宿田の指摘する、ジェンダー考古学等の先端理論に殆ど無頓着だとする日本考古学界に

対する問題提起は、ひとまず置いておくとしよう。しかし、「男性が選択するテーマ=本流のテーマ」とか「女性らしいテーマ」、「男性があまり取り上げないテーマ」などという観点で女性研究者のテーマを分析することには異論がある。このような観点こそが著者のジェンダーに関する偏見を示しているといえる。例えば、装身具類や衣服の研究が「女性らしいテーマ」であるとの発想はどこから生じるのであろうか。現に、玉類や土製耳飾りなどを研究し、興味深い成果をあげている男性研究者は存在するし、形象埴輪や陶磁器などについてもしかりである。また、土器論や石器論で活躍している女性研究者が存在することも事実である。川宿田は、女性は身近なものや美しいものに興味を持つという固定観念にとらわれているのであろうか。川宿田の発想は、数十年前の家庭科で、男女別に「家事=女性」と「技術=男性」を学んだ時代の考え方を無意識に踏襲しているにすぎないのでないだろうか。ここで問題なのは、先端理論を学び、ジェンダー考古学等の新しい分野の課題に意欲的に取組んでいるつもりの研究者でも、何気なく表面に出てきてしまう潜在意識、つまり「ジェンダー・ハビトゥス」から自由になることが、いかに困難かということである。

川宿田は、単に研究論文のテーマについて分析しただけで、多くの女子学生や女性研究者と研究テーマを選択した背景について、議論を交わしたわけではないのであろう。したがって、このような一面的な観方で、女性研究者のテーマを分析するのもやむを得ないのかもしれない。しかし、女性研究者が本人の興味から絞り込んだテーマでも、「考古学の本流から外れたテーマ」、「女性らしいテーマ」として括られてしまうとしたら、このような分析に何か意味があるのであろうか。このような男性研究者の「ジェンダー・バイアス」から抜けきれない視点は、女性研究者の実態から程遠いものと言えるのではないだろうか。このように、

川宿田の分析の基底には、多くの男性が取り組んでいる土器論や石器論こそが考古学の本流であるという暗黙の意識と同時に、「女らしさ」や「男らしさ」に関する「無意識の意識」が存在しているようと思われる。浅学ではあるが、女性学の文献をたて続けに読んでいた頃の記憶によれば、「ジェンダー」を論じることは「～らしさ」に対する再検討（決して挑戦ではない）であったのではないかと思うのだが。

ところで、考古学は物的証拠に基づいて過去の社会を研究する学問であることは先にも述べた。であるならば、川宿田の言う「女性らしい・女性に好まれるテーマ」に挙げられる研究が、男性研究者が中心の考古学界で、これまで、研究テーマとして取り上げられることが少なかった、あるいは無かつたこと自体に問題があると言えよう。例えば、「どのように食品を調理したか」や「どのような衣服を着ていたか」を研究することは、過去の社会を考える上で重要な問題である。食物の調理は、採集や栽培の対象である植物、狩猟や漁労の対象である獸類や魚類と密接に結びつくものであり、最終的に「食卓」に供されるまでの工程が詳らかになってこそ、狩猟具や漁労具としての石器や骨角器、調理具や容器としての土器の機能や型式が意味を持ち、生きた歴史として蘇らせることができるのではないだろうか。装身具類や衣服等についても同様である。したがって、食品加工や衣服、装身具類などの研究は、考古学の傍流でもなければ、「女性らしいテーマ」などとして括られるべきものではないのである。川宿田が指摘するように、女性研究者に、上記のようなテーマを好んで取り上げる傾向が見られるとしたら、それは、これまでの土器論や石器論からは見えてこない、過去の社会の生活実態を研究したいゆえの選択とも言えるのではないだろうか。

ちなみに、筆者は土偶を研究し続けているが、学部時代に興味を持ったいくつかのテーマの中か

ら土偶の研究を選んだのは、中学生の時に写真で出会った遮光器土偶とそこに記された解説（註5）が忘れられなかつたためである。その後、国内外の資料を集めにくうに、先史時代に骨角牙製や石製、土製などの「小像」を持っていた人々の文化を研究することと縄文土偶の意味を解明することとが、先史時代の社会構造にせまるための最終的なテーマとなつたのである。筆者が学部生であつた1970年代当時でも、男女の別なく土器論や石器論に取り組む学生が大半であつたし、参加した調査からテーマを見つけたり、流行のテーマを選んだりと卒論のテーマの選択理由は様々であったようだ。少なくとも筆者の場合、「女性らしい」とか「男性研究者との競合」云々は考えていかなかつたように記憶している（註6）。

何度も触れるように、考古学の第一の目的は、過去の社会の解明である。であるならば、我々が発掘調査で触れるもの、目に見えるもの、そこから得られるデータのすべてが研究対象として大切なことは、言うまでもない。物的証拠のみで過去の社会を復元せざるを得ない先史考古学にとっては、なおさらである。男女の別なく、これまであまり注目されてこなかつたテーマを選び、研究を続けることで、「本当はもっと知りたいこと」が、さらに明らかになり、そうなることで、過去の社会が身近なものになることこそ重要なのである。もし、女性が主に扱っているテーマに偏りがあるよう見えるならば、それは、過去の社会を考察する上で重要な視点であるにもかかわらず、これまで男性研究者が見落としてきたテーマだからなのではないだろうか。川宿田の分析結果からは、数の上では相当多いにもかかわらず、「新しい分野のテーマ」や「所謂女性らしいテーマ」を、選択肢として考えもしなかつた男性研究者の偏狭さが観えてしまうのである（註7）。

ところで、ジェンダー考古学とは、「男女の役割のありよう」について、過去の社会構造を考古学

的立場から考察する分野である。にもかかわらず、すでに指摘したように、意識的に「ジェンダー考古学」に取り組もうとしている男性研究者でも、無意識のうちに男女の役割についての固定観念に縛られてしまうことが、このような研究の難しさと言えるのではないだろうか。

（2）考古資料とジェンダー

ジェンダー考古学の対象となり得る考古資料の性質を考えた場合、いくつかの問題点が浮かび上がってくる。まず、先史時代に於いては、社会構造や生活を分析するための材料が希少なことが問題になる。当時の生活用品（遺物）として我々が目にできる事は、土製品や石製品、骨角牙製品や木製品、金属製品、織維製品、木の実や種子、獸骨や魚骨、貝殻などであり、これらは、住居跡や洞窟遺跡、墓跡や貯蔵穴、貝塚や河川跡など、当時の生活域に運良く遺したものにすぎない。また、我が国の土壤の特質から、特殊な場合を除いて人骨や副葬品が遺されることも多くはない。こうした遺物や遺構から当時の生活を復元するには、出土状況の観察や、同時期、同類の周辺遺跡のデータから、用途なり機能を類推せざるを得ないことは言うまでもない。土器などに遺された線刻や描画、土製や石製の小像などの資料は、具象的ではあるが出土例が少なく、墓や副葬品、古墳の石室に遺された壁画などからも限定的な情報しか得ることができない。したがって、先史時代の社会構造を分析しようとすれば、現生の無文字社会などとの比較に頼らざるを得ない面も出てくるであろう。しかし、先史社会と現生の無文字社会とでは、各々の社会が持つ情報量は格段に違つており、社会的な「バイアス」の質など、比較材料としての問題点は多く、先史時代の「男女のありよう」を探ることには大きな困難が伴う。

次に、有史時代には、考古資料以外の記録が残っているという利点がある。しかし、記録が残つ

ているゆえの問題点も想起できる。つまり、残された記録類は、記録者の視点や思想と切り離せないものであること、また、記録者は、その時代の思想や風潮（＝社会的なバイアス）から大きな影響を受けていることなどである。さらに、記録類の量的・質的な偏りも問題となる。残された記録類は、大半が男性による記録で、かつ、男性の活動について記録している場合が圧倒的であること、女性の活動が記録されている場合でも、歴史の表面に現れる限りの女性についての記録であり、その他大勢の一般的な女性については、記録さえ残っていないことなども大きな問題といえよう。

以上のような状況を踏まえると、ジェンダー考古学のような抽象的な分野を扱う場合、先史時代研究に於いては考古資料そのものから得られる情報とその限界を見極めることができが最も重要なとともに、研究者の側に存在する「バイアス」をいかに自覚的に取り除くことができるかが最も重要なとなる。また、ジェンダー考古学の研究対象として、どのような資料やデータを選択するかも成果

にかかわってくると言えよう。一方、有史時代に於いても、考古資料そのものから得られる情報の限界を見極めることや研究者側に存在するバイアスを取り除くことが必要なことは言うまでもない。記録された資料やデータの選択に当たり、どのようなジャンルを研究対象とするかが先史時代以上に重要になってくると思われる。対象とする記録のジャンル（神話や伝承、正史、軍記、旅日記や日記、隨筆、説話、小説、絵巻物など）によって、記録者の目的及び意識的・無意識的な「バイアス」、その時代が持っていた価値観、さらに、研究者自身の潜在意識の中にある「バイアス」などを何重にも取り除く必要が生じる。このような作業の後に、はじめてジェンダー考古学の資料として活用することが可能になる。

過去の社会における「男女のありよう」を探る作業は、先史時代においても有史時代においても、一朝一夕にできるものではなく、困難で時間のかかる作業といえる。容易に、ある種の資料を取り上げて任意の解釈を行える分野ではあり得ない。

3 ジェンダー考古学研究の現状

(1) 我が国における研究の現状

我が国においては、松本や川宿田の指摘（松本他1999、松本 2000、川宿田 2006）にもあるように、ジェンダー考古学は、ほとんど周知されておらず、新たな研究分野のひとつと言える。実際、研究の手段や方法などは、手探り状態というか現状で、何をどのように扱うかを間違えると見当はずれの研究が一人歩きする危険性を多く孕んでいる分野もある。

ジェンダー考古学については、前項で検討した川宿田の論考（川宿田 2006）の他にも、松本直子他による「フェミニズムとジェンダー考古学」（松本他1999）、「考古学と女性の視点」（菱田 2004）、「ジェンダー」（松本2008）などがある。中でも松本は、日本における女性考古学者の少なさ、大学等での学術的仕事に就く女性の少なさ、このようなことが原因で、考

古学研究から女性の視点が欠如すること。さらに女性の「役割モデル」の欠如か女性研究者（＝大学等で研究者として活躍する）の少なさを指していること。我が国には「ジェンダー」に関する教育課程がほとんど存在しないことなど、女性研究者の育成を阻んでいる要因を指摘し、いち早くこの分野に於ける問題点を提起した研究者である。

松本は、学術雑誌等における女性の貢献度を測るE-Scoreを用い『考古学雑誌』と『考古学研究』における女性研究者の論文とその他の記事について検証し、徐々にではあるが女性による学術的な論文の投稿数が増えつつあることなどを指摘すると同時に、『American Antiquity』や『Historical Archaeology』などアメリカの学術雑誌の例を引き、女性が、すでに男性によって占領されてしまった分野とは別に新しい分野を確

立しつつあること、『考古学研究』誌上でも1980年代以降、継続的に女性研究者の投稿が見られることなども変化のひとつとして指摘している。また、我が国においては、性差による偏見がかなり根深く、このような状況を打破するためには、フェミニズムの視点が欠かせないとして、ボーヴォワールの『第二の性』や上野千鶴子の『家父長制と資本制』を引きながら、女性に対する「差別」は、あらゆる社会的・心理学的・文化的要因と密接に関連しているとし、ジェンダー考古学について「考古資料に基づいて過去の社会におけるジェンダー、すなわち、性分業のパターン、男女の経済的・社会的較差、そして世界觀におけるシンボリックな位置づけ等について復元し、それらの形成過程や他の社会的・文化的側面との関係等について探究するものである。」と定義している。さらに、「何をもつて重要な問題とみるか、どのような方法を正しいとみるか、というような非常に根本的な枠組みを問い合わせない限り、いくら女性についての事例研究を積み重ねても根本的な解決には至らない」としている。さらに、「現在の考古学研究を規制している男性中心的考え方や問題設定をそのままにして、単にこれまで欠けていた女性の役割を補完するだけでは、根本的な問題解決には至らず、考古学的証拠からは導き出せないようなどころまで過去のジェンダーを復元し、現代社会における性的抑圧の構造を強化・再生産することに意図せずして貢献してしまうことを避ける」ため、フェミニズムの視点からこれまでの研究成果を見直すことの必要性を説く（松本他 1999）。さらに松本は、『縄文時代の考古学10』のIV社会組織の「ジェンダー」の項（松本 2008）で、民族事例や「ものづくり」に関するステレオタイプの観方（例えば：石器づくり=男性、土器づくり=女性）を縄文社会に当てはめることに凝集を挿みつつ、母系制や父系制、縄文社会の構造や年齢構成、人骨や副葬品、装身具、食性分析などからジェンダーに関する問題点を整理している。また、菱田も、母性や「母子像」を例に引きながら、男性領域の平均値をもって人間全体の平均とするような見方で考古資

料を分析してきたことの危うさを指摘する。そして、女性研究者が、自らの視点・視野と既成の学問とのずれにより、多視点の見方を得られるメリットにもっと自覚的になるべきであると説く（菱田 2004）。なお、最近になって、山梨県立考古博物館の特別展『図録』発掘された女性の系譜－女性・子ども・家族の造形－（保坂他 2010）を入手した。この図録の編集方針は、まさに、男性領域の平均値をもって人間全体の平均とするような見方で考古資料を展示・解説したものであり、このような「図録」の内容が、原始以来の女性の「姿」として一般に受け入れられてゆく過程を垣間みたように思う。このような「女性像（考古資料そのものではなく、概念的な意味での女性像）」の再生産は、所謂ジェンダー・バイアスの所産で、ジェンダー・バイアスを増幅するものである。このようなバイアスは、考古資料を解釈する場合に取り除かれるべきものであり、不用意な言説が一般書で広められた場合、多くの誤解を生む危険性を孕んでいることは前に述べた。また、発信者が公的機関や高名な人間であればあるほど、誤ったイメージの定着度は高くなることも指摘しておきたい。（註8）。

さて、ここで伝統的な男性研究者の著書として、渡辺仁の『縄文式階層化社会』（渡辺 2000）の内容に触れておきたい。

渡辺は、狩猟採集社会は、平等な社会であるという人類学や民俗学の概念が、考古学の観念も束縛しているとして、「狩猟採集社会=平等社会」へのアンチ・テーゼとして『縄文式階層化社会』を著したとしている。渡辺は、狩猟採集社会であっても、特殊条件下では例外的に階層化が起こり、技術や経済の分化と不可分の信仰・儀礼の分化が伴うと言う。そして、貧富の差は、経済力や権力の差だけではなく、自然界との儀礼的関係（=神々との関係）の深さの差として発生すると言う。さらに、縄文式階層化社会のモデルとして、生きている狩猟採集民の社会構造モデルを北洋沿岸のアイヌや北西海岸の民族例（ヌートカ、クイノールト、クラム、アリュート、ニブフ）に求め、縄文社会が定

住的階層化狩猟社会であることは、縄文土器が象徴しているとし、精製土器は、社会の上層によって作られ、政治的指導者により保有・管理された財宝であり、威信経済の象徴であるといふ。縄文社会の指導者は、退役狩猟者で、元は、大型肉食獣の狩猟者（困難を伴う獣＝健康で優れた男）で、退役後首長・長老群を形成し、指導者層を成すといふ。そして、非狩猟者（女・子ども・老人など）を許容する社会では階層化が起り、体力的に劣る者も受け入れる社会が形成されるといふ。つまり、縄文社会は階層化社会であるが権力社会ではなく、そこが弥生社会（＝農耕社会）との違いであるといふ。また、現生の狩猟採集民の儀礼体系とともに、大型の環状遺跡（ストーンサークル、ウッドサークル）などは共同体の福祉（＝集団儀礼）に関するもので、土偶などは、個人の福祉（＝玩具、信仰・儀礼関係）に関するものであろうとしている。

さらに、渡辺は、縄文時代が階層化社会であったために、弥生時代にスムーズに移行できたのだといふ。つまり、日本における農耕社会は、稻作の伝播によって成立したもので、この受け入れを迅速にしたのが、縄文社会のシステム管理やカレンダー管理に精通した指導者層の存在であって、このソフト面（＝システム管理）に携わっていたのが指導者層の男性で、ハード面（＝実労働）に携わっていたのが被支配者層である女性や老人、体力などの条件で指導者層に入れなかつた男性などであると結論づける。

このような縄文社会についての見解は、ジェンダー考古学の視点を取っていないくとも、受け入れ難いものである。縄文時代に於けるストーンサークルやウッドサークルの意味は専ら解明されておらず、精製土器や土偶の作り手や解釈についても、このような結論に達する明確な根拠は示されていない。また、民族事例として引き合いに出された集団の文化を観察する際にも、それらの民族の、そして研究者自身の「ジェンダー・ハビトゥス」や「ジェンダー・バイアス」などには何の配慮もせず、民族事例を借用し、考古資料を分析していることがよく分かるであろう。

（2）Fumoko Ikawa-Smith の研究

カナダの McGill 大学に籍を置く井川は、日本考古学界の現状について、先史考古学部門に於ける「ジェンダー考古学」研究が、まだ初期の段階であること、「ジェンダー」に関する研究は考古学界よりも女性史学界が先んじていることなどに触れ、1945年以前、1945年～1970年、1970年以後のそれについて、我が国考古学界に於ける研究史を紹介している。1945年以前の研究では、民俗学に於ける女性研究、青鞆の活動、高群逸枝の活動などを紹介しつつ、1945年～1970年の研究につなげる。戦後の日本では、マルクス主義的な歴史研究からではやされ、和島誠一などにより、縄文時代は平等で母系的な、そして母系制の氏族社会であったことが主張された（註9）こと。さらに民族学や文化人類学からジェンダー研究に學問的裏付けをあたえたこと、岡正雄の研究、さらに古墳時代に関する間壁賀子の研究などを紹介している。

1970年代以降については、1975年の国際婦人年に因み、前近代女性史研究会や女性史総合研究会などが設立されたこと、このような中で、考古学者により労働者のジェンダーに関する論文が書かれたことなどが紹介され、この時期、女性史やジェンダーに関する研究が盛んになったこと、そして、1960年代以降の緊急発掘調査の爆発的な増加で、考古学に従事する研究者や調査員が増加したにもかかわらず、女性は掘削の発掘作業員や整理作業員がほとんどであり、1960年から1970年の間に、学術的なポジションにあったのは間壁賀子と間壁賀子の二名ぐらいであったことなどを指摘している。そして、先にも述べたが、1995年の時点で、日本考古学協会員に女性が占める割合が2.77%にすぎないこと、学術的なポジションに就いている女性研究者がいかに少ないかにも驚きを隠さない。また、各自治体や自治体が設立した財團などで正規職員として雇用されている女性研究者がいかに少ないので指摘している（註4参照）。

さて、井川の論考は、女性についてより多くを叙述しているとして、ここで、土偶研究に移る。まず、歴

史民俗博物館の土偶プロジェクトのデータをもとに、土偶の分布について触れる。さらに、土偶が故意に破損されたものか否か、および土偶の出土状況について、いくつかの研究を紹介している。また、土偶の解釈について、初期の学説として、白井光太郎の玩具説や神像説、装身具説や護符説をもとに坪井正五郎や大野延太郎、鳥居龍蔵等の説を紹介し、縄文土偶が女性像のみなのか男性像も存在するのかについての論争を紹介している。さらに、井川は、土偶の意味や機能についての研究から1920年代の中頃以来停滞しているとし、その後の数少ない論考として水野政好的「土偶祭式の復元」(水野1974)などを引用している。また渡辺仁の一連の民族考古学的な研究(渡辺1997、1998、1999)に触れ、縄文土偶の起源はバイカル湖エアリにあり、土偶は「母神で、豊穣と再生の保護者」であり、最近まで狩猟に依存していた村の、木製の女神像も、「家の守り神であった」という例から、土偶も「家族の幸福を守る女神」であったとする説も紹介し、縄文土偶の機能をすべて同一のものとしている点は、両者とも変わらないと喝破している。さらに、渡辺の考古資料の解釈については、土偶を物珍しげに取り上げて1920年代の研究に戻ったようだと酷評している。そして、縄文土偶には、いくつかの用途が存在するとした野口義磨らの研究を評価しつつ、形態論と編年論に始終した1990年代の不毛な土偶研究を渡辺が指摘した点は評価する。

今後の展望として井川は、15,000例を超える土偶の集成資料は、ジェンダーの探求に十分であり、文化財保護に携わる研究者が学術誌に記録を取り、時を置かずして報告書を刊行することを評価している。しかし、これらの記録は、ほんの一部だけしか国外に知られないことが問題だとしている。また、土偶の特徴をいくつか挙げながら、前代的な解釈から脱却する必要性を説いている。

さらに、「縄文土偶の解釈」にあたって、引用した文献が、一例を除いて、男性によるものであったことに触れ、考古学研究におけるジェンダーの不均衡を指

摘し(註10)、水野政好や渡辺の土偶の解釈は、20世紀の日本の母親を投影したものであろうとし、縄文時代の狩猟採集民が多くの子どもを望んだか?とする藤村淳子の論考なども引用する。また、早くから男性土偶の存在を指摘していた藤森栄一や土偶は性別やジェンダーを超越したものだとする原田昌幸の論考(原田1999)、小林達雄の「第二の道具」説(小林1977他)なども紹介している。

さらに、耕作の可能性が指摘されている富山県の桜町遺跡や青森県の三内丸山遺跡、そして製塩遺跡として知られている茨城県の立木貝塚では1000点をこす木苑土偶が出土していることなどに触れ、縄文時代が単に狩猟や採集、漁労のみで成り立っていた社会ではなく複雑な社会であり、一面的な解釈が成り立たないことを指摘する。

なお、縄文土偶については、神話や儀式に関わる女性のみではなく、縄文社会に於ける女性の経済的な役割や社会的な組織を知る上で大きな可能性を持っていると指摘するにとどめ、縄文社会のジェンダーとの関連については言及を避けている。

(3) Margaret Ehrenberg の研究

筆者がジェンダー考古学について興味を持ったのは、M・エーレンバーグの著書『Women in Prehistory』についての穴沢の書評(穴沢1991)がきっかけである。その後、河合信和による訳本『先史時代の女性—ジェンダー考古学事始め』を入手し読み進んだ。エーレンバーグは、一般読者と考古学の専門家の双方に向か、この本を著したという。特に、彼女がこの著作を読んでほしいと欲したのは、「石器時代人(Stone Age Man)」とともに暮らしたはずの「石器時代女性(Stone Age Woman)」を念頭に置いていたことさえなかつたように思える考古学者であると「はじめに」で記している。考古証拠が先史ヨーロッパの女性の暮らし・社会的役割・身分を照らし出す光を当てられるとはすれば、どのようにすれば可能かを探ると同時に、考古証拠の限界や利用法について、専門知識を欠いた一部の女性史研究者

に向け、考古証拠の何たるかを示すことは考古学者の責任であり、女性の視点で考古証拠を解釈することの魅力を伝えたかったとも記している。また、権力や信仰のような容易ではない主題を扱うことも可能になる、考古証拠の検証可能な理論的モデルを作る事の大切であるとも説く。そして、このような中で見落とされてきた一つの分野が、先史時代のジェンダーに関する研究であるという。彼女自身も先史時代の女性についての研究が眞面目な学術的研究主題であることに気づくまで、長い時間が必要であったと告白している。そして、この著作を、ヨーロッパ先史時代の記録から女性の役割と身分を研究できるかどうかの可能性の一端を追求しようとする一つの試みであると位置づけている。

先史時代の女性の探求とその方法では、考古証拠には文字記録よりもはるかに大きな長所（=過去の人々が無意識に残した証拠）があり、先史時代のすべての女性と男性について語ってくれるため、一社会内部の階層化の程度についての示唆を得ることも可能であるという。男性優位社会がいつどこで発生したかについての回答は、考古学の領域の中に必ずあるはずだとも言う。しかし、良い考古学は、手に入った証拠全てを最も満足させる学説を選択し、関連するデータと矛盾しないものであるという態度を貫いており、自分が提示する考えは、貧弱である考古証拠にどれだけうまく合致するかで判定されるはずだという態度を堅持している。

具体的に、人類学の証拠や人間以外の動物や靈長類の行動、後世の文献資料や神話などを通じて先史時代の社会を解釈する際の問題点を指摘しつつ、考古証拠としての墓や人骨および副葬品、工芸と活動、集落のあり方、芸術作品などから過去の女性の暮らしを復元するのに価値の高い情報をもたらし得るとしている。例えば、副葬品の種類で無邪気に性別の役割を判断することや土器に残された指紋などから、製作者が女性であるとされてきたことなどの危うさを指摘し、少しでも疑問があれば、それに続く主張は説得力を欠くことを繰り返し説明している。また、芸術作品にしての女

性像を取り上げ、先史時代の女性についてのかなり重要な情報源ではあるが、女性の造形が、その社会内部の女性の本当の位置を映していると考えるのは危険であり、他の情報源と同様、十分な注意をはらって研究し、解釈しなければならないと指摘している。

さらに、ヨーロッパの最古の共同体、最初の農民、青銅器時代からケルトの鉄器時代へと論を進めていく。

最古の共同体では、獸骨のみが発見されることが多いため、人類は肉食に依存していたと考えられてきたが、証拠として保存されていない植物性食料が、どちらかというと高い割合を占めていた可能性があること、ヒトの身体的・文化的な発展は、悉く男性主導でなされてきたと考えられてきたが、女性の果たした役割も看過できないこと、ヒト以外の靈長類ではメスとオスで食料収集活動に違いがある例は見られないこと、したがって、恒常的な男女の分業は、ヒトの進化のかなり遅い段階で現れたのではないかという指摘に着目する。獸骨の大量出土は、証拠が残りやすい食料であったため、肉が最も重要な食料であったかどうかは不明であるとし、男女の分業の発生を大形獣の狩猟技術の発達に求める。小形動物の捕獲や死肉を漁っていた初期人類の段階では、男女ともに行えた食料の確保が、妊娠中の女性や乳飲み子を抱えた女性には、大形獣の狩猟は無理になり、植物性食料の採集なら可能であったことが、男女の分業化の始まりで、自然にそうなったものであろうとしている。また、エーレンバーグは、ヒトの育児期間の長期化や母親が子どもにとっての最初の教師となること、大人しく、メスと喜んで食物を分け合おうとするオスの選択を繰り返すことなどでも、女性が人類の進化に核心的な役割を果たしていたに違いないと指摘する。

なお、現生のアボリジニのティウイ族は、女性が石斧を作り、陸上の哺乳動物は女性が捕獲し、男性は、海と空の食料獲得に従事していること。新石器時代のヨーロッパには、男女ともに釣針とともに埋葬されている例があることなど、分業の内容が、普遍的なもの

でないことも指摘する。

また、スペイン東部のBC7000~3000の洞窟に描かれた蜂蜜を採集する女性の絵を紹介し、当時の女性が、多種・多様な食料を採集していたこと、植物性食料の摂取量の多さを示す石器の存在。特に、中石器時代には、細石器を木の枝や骨角に埋め込んで使用した道具（おろし器、搔器、釣り針、鉈や矢、ナイフや鎌など）の存在が知られ、磨り石と細石器が同時に出土する例が多いことなども植物性食料の占める重要度を暗示しており、豊富な食料が定住に近い長期の潜在を可能にし、両性とも食料を平等に集めていたことで、男女が平等な社会であった可能性をも指摘する。

次に、縄文時代の土偶の解釈にも関連してくる後期旧石器時代の芸術であるが、エーレンバーグによれば、これらは、洞窟壁画と彫刻されたり線刻されたりした骨製や石製の遺物、そして、「ヴィーナス」もしくは「女神」像の三つのカテゴリーに分けることができる。フランスやスペインの洞窟に遺された壁画は、狩猟対象の動物が描かれ、彫刻や線刻で表現された骨製や石製の遺物にも動物を表現したものが多く見られる。ヴィーナス像や母神像は、ヨーロッパ各地から60点を超す資料が出土しており、粘土を焼いたものや浮き彫りの例の他は、軟らかい石やマンモスの牙を彫刻したもので、高さは6cm~22cmの範囲に納まるが、概して小型のものが多いという。様式的には、ほぼ均一性を保っており、大きな乳房と大きな尻、太い腿を持ち、腕や脚、顔などの表現は簡略化され、大雑把な表現に留まるか、全く表現されないかで、概して、裸体であるのが特徴であるといふ。

また、旧石器時代の小像が一定の分布域と著しい類似性を示すのに対し、新石器時代の小像は、粘土製ということもあり、地域ごとに別々の特徴を持つようになるが、ごく基礎的なレベルでは関連性を持っているといふ。

これら旧石器時代の小像、新石器時代の小像とともに役割は様々であり、アナトリアの歴史記録から農産の女神とされている小像も存在するが、これが唯一の解

釈ではあり得ず、住居跡の炉のそばからの発見される小像は、火のおこし手・守り手と関連する精靈としての觀方など、様々な解釈があるのが現状であるといふ。なお、これらの小像について、通過儀礼の際の道具や広大な地域に分布する共同体同志のシンボルとしてのコミュニケーション手段などと解釈している研究者の存在も指摘している。

初期農耕（＝園耕）社会では、狩猟も続行されており、いわゆる農耕を始めたのは、植物生態の最初の観察者で、長い試行錯誤によって、植物の育て方と世話の仕方を編み出した女性であった可能性が高いとエーレンバーグは指摘する。初期農耕社会では、家畜は数頭しか飼われておらず、リニア土器文化の時代も、副葬品などからは、男女の差が窺えない平等な社会であった可能性が高いといふ。

ヨーロッパに於ける男性優位型農耕社会の始まりは、家畜の多頭飼育の開始に起因し、それは、新石器時代後期頃（BC3000頃）であったろうというのがエーレンバーグの見解である。そして、新石器時代の第一段階から文書記録が出現するまでのどこかで起こった、家畜の多頭飼育と犁を使う農耕の始まりが、父系出自や土地所有権と相互に関連するとしている。

さらに、青銅器時代になると豊かな上流階級が出現し、墓も共同墓から單一墓へと移行し、社会の階層化がより鮮明になったといふ。しかし、青銅器時代においても、男女の社会的な差は、遺物として遺された副葬品からだけでは、判断が困難であるといふ。

鉄器時代になると、戦車とともに葬られた女性指導者の存在なども見られるといふが、逆に、一般的に大多数の女性についての資料は遺っておらず、不明な点が多いといふことである。

エーレンバーグは、ヨーロッパを対象に、ジェンダー考古学的観点で旧石器時代から鉄器時代までを概観し、「先史時代の女性の研究」が可能であることを明らかにしようと試みた。そして、狩猟採集社会以来、女性の觀察力が農耕を開始するきっかけを作ったのであろうといふ。新石器時代前期の園耕経済の時期以降

に、家畜の多頭飼育と草の使用による耕作により、食料生産への男性の関与の度合いが高まつたことで、女性の役割が低下し、家族内の女性の役割も低下したのであろうという。

しかし、このような変化はヨーロッパ全土で必ずしも連続的ではなく、齐一的でもなかったとして、先史時代の考古証拠の解釈には、問題が尽きないことを強調する。

4 おわりに

ここまで、我が国とのジェンダー考古学研究の現状と、井川史子氏やM・エーレンバーグ氏の論考を紹介しながら、我が国とヨーロッパ先史時代におけるジェンダー考古学及び研究の問題点を概観してきた。

この稿を起こすきっかけとなったのは、6月の熊谷市男女共同参画室からの講演の依頼であった。井川氏の論文やエーレンバーグ氏の著書から学ぶことも多く、男女共同参画室からの依頼に応じ、「考古学とジェンダー」の問題を取り上げ、文献探しを始めたところ、我が国では、岡山大学を中心としたグループ以外に「ジェンダー考古学」に取り組んでいる所は無く、まさに、途についたばかりであることを改めて実感した訳である。さらに、一見、女性研究者の理解者であるような考察をしながら、自身の「ジェンダー・バイアス」に全く気付いていない男性研究者の存在、明確な結論を準備せずに、安易に土偶や女性像を「ジェンダー考古学」の考察に使用している論考が見受けられたことなども、この迂遠なテーマに取り組もうと考えた理由である。また、この稿で、井川氏やエーレンバーグ氏の論文を引用したのは、主に繩文土偶の研究歴をひもときながら、容易には「ジェンダー考古学」に結びつけない井川氏や、ジェンダー考古学的視点の重要性を論じながら、考古資料の解釈には至って慎重なエーレンバーグ氏の研究姿勢に惹かれたからである。特に、エー

さらには、考古証拠は、個別の研究者が好み解釈の枠組みに左右されやすいこと。過去に多くの考古学者がヨーロッパ先史人(men)について書く際に、先史時代の男性と生活を分担してきた先史時代の女性は、意識的にはあろうが無視されてきたこと。しかし、女性は先史時代にも生きていたのであり、目に見えるようになることが可能のこと。そして、女性の先史時代が描けることを示してきたとして筆を置く。

レンバーグ氏は、後期旧石器時代から青銅器時代まで作られた「小像」の解説(母神か、それともヴィーナス像か)の中で、「像そのものを見直すこと」と「母神への信仰を証明する証拠を熟考すること」の必要性、「希少ながら存在する男性像を除いて、女性像だけを考察の対象にしてきた結果、先史ヨーロッパを通じて人々に崇められ、偶像として表現される母神(Mother Goddess)という考え方が出来上がったこと」などに繰り返し触れ、ヴィーナス像を単純に女性の身分と関連づけることを戒め、家母長制社会についても、その証明は得られないないと慎重な立場を崩さない。穴沢氏も書評で指摘しているように、考古学研究者としての立場とフェミニストとしての立場の一線を引いている。

ところで、研究者が自重すべきは、ジェンダー・バイアスの過去への投影や、民族事例などの「安易で偏った」借用と解釈、そして、ジェンダー考古学に名を借り、女性が輝いていた「バラ色の過去」という幻想をまき散らすことなのではないだろうか。考古学研究に必要なのは、物的証拠の熟考と科学的証明の重要性である。すべての偏見から自由になり、過去の社会を探求することが大切になるであろう。

なお、この検討結果を基にした、具体的な土偶の解釈については、「土偶研究とジェンダー考古学(II)」として次号にまとめる予定である。

- 註1 上野千鶴子や織田元子、小倉千加子、金井淑子、富岡多恵子ら女性学の立場からの研究が目立つ。特に上野千鶴子は多作である。
- 註2 研究社の新英和辞典によれば、(1) (文法) 性、(2) (人の) 性、性別、社会的・文化的意味づけをされた男女の差異【ラテン語「種類」の意】と説明されている。なお、オックスフォード現代英英辞典によれば、(2)は、*the condition of being male or female* と説明されており、「差異」という意味は含まれていない。
- 註3 E-スコアとは、学術雑誌等に於ける女性の貢献度を数値に換算したもので、全論文数に占める女性が関わりかたを表す。
- 註4 筆者が勤務する埼玉文でも、女性調査員の全調査員に占める割合は増加している。ちなみに、事業団発足当時は、1~2名に過ぎなかった女性調査員が現在は4名、最も多いときは5名在籍していた。女性調査員の比率が増加する傾向は、全埋協の名簿からも見て取れる。
- 註5 写真の土偶は、後になって、亀ヶ岡遺跡出土の土偶であることが分かった。現在、木造町の駅舎のモデルになっている有名な遮光器土偶である。
- 註6 筆者が卒論のテーマに土偶を選んだ当時は、現在ほど土偶研究は盛んでなく、土偶研究の第一人者である江坂輝弥先生を超えるつもりで取り組めと指導教授に言われたことが記憶に残っている。
- 註7 特に、縄文時代研究に於いては、土器論や編年論が主流を占めていることは事実であるし、これらの研究が重要であることに異論はない。しかし、この分野の研究は男性の専売特許ではないのに、「女性の土器屋さん」とか「女性はお人形さん(土偶のこと)が好きだから」などという発言を耳にするにつれ、男性研究者の意識の偏狭さを思い知らされること大である。
- 註8 このような点は、調査成果を一般に公開する際に最も留意しなければならないことであろう。実際、この正否を確かめもせず、誰々先生が○○と言っているのに、あなたは××と言っている。それが事実なら大変なことになるなどと言う問い合わせ(?)があることも少なくない。
- 註9 現在は、母系制の存在自体が否定されている。
- 註10 註の6でも触れたが、1970年代から1980年代の前半にかけては、土偶研究は現在ほど盛んではなく、学史的な先生方の研究以外には、若い研究者による著作はあまり存在していないかのように思う。ちなみに、土偶の解釈について述べた男性研究者以外のものとは、1984年に刊行された拙著『土偶の知識』(東京美術社)のことである。

引用・参考文献

- E·Ardener, S.B.Ortner 他 1987『男が文化で女は自然か? -性差の文化人類学-』山崎カヲル監訳 晶文社
 Fumiko Ikawa-Smith 2002『Gender in Japanese Prehistory』『In Pursuit of Gender』Worldwide Archaeological Approaches Edit by Sarah Milledge Nelson University of Denver
- Margaret Ehrenberg (原著) 1989『Women in Prehistory』192 pages 52 figures, and an index British Museum Publications, Paper.ISBN
- Margaret Ehrenberg 1997『先史時代の女性 一ジエンダー考古学事始めー』訳:河合信和 河出書房新社
 穴沢啄光 1991 書評「マーガレット・エーレンバーグ『先史時代の女性』」『考古学研究』第38卷1号
- 井上輝子 1980『女性学とその周辺』勁草書房
- 上野千鶴子 1986『女は地球を救えるか』勁草書房
- 上野千鶴子 1990『家父長制と資本制』岩波書店
- 織田元子 1988『フェミニズム批評 理論化をめざして』勁草書房
- 加藤秀一 2006『ジエンダー入門 ー 知らないと恥ずかしい』朝日新聞社
- 金井淑子 1989『ポストモダン・フェミニズム ー 差異と女性ー』勁草書房
- 川宿田好見 2006『日本考古学界におけるジエンダー』『考古学研究』第52卷4号 考古学研究会
- 小林達雄・亀井正道 1977『土偶・埴輪』日本陶磁全集3 中央公論社

- 藤村淳子 2004 「考古学と女性の視点」『文化の多様性と比較考古学』所収 考古学研究会
- 保坂康夫他 2010 「発掘された女性の系譜－女性・子ども・家族の造形－」第28回特別展図録 山梨県立考古博物館
- 松本直子・中園聰・川口香奈絵 1999 「フェミニズムとジェンダー考古学－基本的枠組み・現状と課題－」
『HOMINIDS』Vol.002
- 松本直子 2000 「あなたにはどう見えますか？－ジェンダー考古学雑感－」『考古学研究』第47巻1号
- 松本直子 2004 「認知・身体・文化」『文化の多様性と比較考古学』所収 考古学研究会
- 松本直子 2008 「ジェンダー」『人と社会 人骨情報と社会組織』縄文時代の考古学10所収 同成者
- 水野政好 1974 「土偶祭式の復元」『信濃』26巻4号 信濃史学会
- 渡辺 仁 1997 「縄文土偶と女神信仰－民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（I）」『国立民族学博物館研究報告』22巻4号
- 渡辺 仁 1998 「縄文土偶と女神信仰－民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（II）」『国立民族学博物館研究報告』23巻1号
- 渡辺 仁 1999 「縄文土偶と女神信仰－民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（III）」『国立民族学博物館研究報告』24巻2号
- 渡辺 仁 2000 「縄文式階層化社会」六興出版

設立30周年記念

研究紀要 第25号

2011

平成23年3月14日 印刷

平成23年3月24日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社文化新聞社